【論　文】

実習での子どもの「泣き」に対する学生の困り感に関する検討

―経験ある保育所保育士の関わり方を活用した授業展開をめざして―

吉武久美子　浦川麻緒里　林　悦子
山本香奈美　橋口　唯　三浦佳代子

A Study on the Students' Feeling in Trouble About Crying of Children in Practical Training: Aiming at Class Development Utilizing the Way of Experienced Nursery Teachers

Kumiko YOSHITAKE　Maori URAKAWA　Etsuko HAYASHI
Kanami YAMAMOTO　Yui HASHIGUCHI　Kayoko MIURA

要　約

保育士の需要は大きく，保育士養成の教育の充実は重要な課題である。中でも実習は学生にとって貴重な実践の場である。しかし，最初の実習でのつまづきから保育士になることをやめてしまう学生も少なくない。研究Ⅰでは，保育所実習後の学生たちを対象に，実習での困り感や難しさを調査し，学生にとっての幼児の「泣き」への対応の難しさを明らかにした。研究Ⅱでは，学生たちがつまづく場面での経験ある保育士たちの対応を調べ，３年以上の経験のある保育士の多様な視点を明らかにした。研究Ⅲでは「泣き」の事例を授業でとりあげ，学生の個別検討，小集団での話し合い，経験ある保育士の多様な考えを提示してのふりかえりという試みを行った。幼児の「泣き」をネガティブに受け取ってしまう自分に気づくこと，幼児が泣く場面での自分のとまどいや不安を仲間との語りあいの中で共感し理解すること，泣くことの背景にあるかもしれない多様な原因を考え，泣いている子どもを泣き止ませられないという自分に注意を向けるのではなく，泣いているその子や周りの子どもたちのために何をしたらいいかを考えるという視点のきりかえの有効性が示唆された。

キーワード：幼児，泣き，保育士の関わり方，保育所実習，学生
Infant, crying, how to treat children, nursery school training, student,

目的

乳幼児期は子どもにとって自己と他者への基本的信頼感の形成，並びに社会・集団体験のスタートとして一生涯の中でも非常に重要な時期である。この乳幼児期に，厚労省の調査結果によると，保育所等を利用する乳幼児の数は2018年で261万人となり前年と比較すると６万８千人の増加となった（厚労省「保育所等関連状況取りまとめ（平成30年４月１日）」)。その中で，１・２歳児は921,313人，３歳以上児は1,543,144人である。３歳以上児をとりあげると，３歳以上の子どもたち全体の中で保育所等を利用している子どもたちの割合は51.4％であり，子どもの半数以上が保育所を経験して就学を迎えるという状況に至っている。

このように，近年，心理面，身体面など発達の上で重要な乳幼児期を保育所等ですごす子どもたちは多く，保育士の需要と役割はますます大きくなっている。したがって，保育士養成校においては，保育士を志向する学生たちに対してどのような教育を行って保育士として成長させていくか，保育教育に関する授業プログラムの検討と充実が重要である。

近年，保育者をめざす学生であっても幼児と実際に関わったことがないという学生が多い。幼児と関わったことの少ない学生にとって実習は幼児と関わることのできる貴重な現場体験である。しかし，実習前には，子どもたちや先生とうまくコミュニケーションできるのかなど実習に対するさまざまな不安を感じていることがこれまでの研究においても報告されている（鈴木・仲本，2005，東ら2003，長谷部，2007，入江・福地・入江，2014)。さらに，最初の保育実習で23％の学生が子どもとの関わりの場面においてネガティブな感情を持ったことが報告されている（小川・鎌田，2014)。

このように，実習前に大きな不安を抱えたり，実習において幼児とのかかわり方に不慣れなことによりうまくいかない経験をし，実習をつまづきと感じたりして，幼児対応に対してネガティブな感情を抱えてしまうと，学生たちのその後の幼児教育や保育への志向性にも影響を与えてしまう可能性も考えられる。

そこで，研究Ⅰでは，まず，保育所実習を経験した学生たちを対象に，実際に子どもとのどのような場面に困り感や難しさを感じるのかを調べることを目的とする。

更に研究Ⅱでは，研究Ⅰの結果を踏まえ，学生たちがつまづくような場面で，経験ある保育所保育士たちはどのような対応をしているのかを調査し明らかにする。

さらに，研究Ⅲでは，実際の授業の中に研究Ⅱで経験ある保育士に対して行ったものと同じ事例をとりいれ，場面想定法で学生に個別でその事例を考えさせ，小集団で話し合いをし，その後，経験ある保育士の多様な考えを提示してふりかえりをさせるという授業展開をする。そして，そのような授業展開によって，学生たちが何を理解しどのようなことを考えたのかを明らかにする。

研究Ⅰ：学生調査

方法

1．調査対象

Ａ県保育系大学で，複数回の幼稚園教育実習，保育所実習を経験したことがある３年生84名（女性）を調査対象とした。

2．質問紙構成

質問項目は以下の通りである。

⑴　幼児の問題行動を表す19の状況（村松，2003）を取り上げ，保育現場で，自分だったらどの程度困ると思うか

なお，19の状況については，保育場面に適するよう，一部文言を変更（表１参照）して使用した。

⑵　実際に実習中に，子どもの対応に困ったことは何だったか

⑶　その他：実習経験，乳幼児との関わり，性別

結果と考察

⑴　幼児の問題行動を表す19の状況（村松，2003）について，学生がどの程度困ると思うかについて５件法（５：とても困る―１：全く困らない）で回答を求めた。

なお，上記の幼児の問題行動19の状況とは，幼児の問題行動というよりも，幼児に対して学生や保育者など大人側が問題だ，困ったと感じている場面である。

その結果，表１に示されるように，平均値が4.0点以上のものは４項目あった。「①食事

表１　幼児の問題行動を表す19の状況と困り感の平均値（５段階）

1	食事のとき，食べずに遊んだり，立ち食いする	4.13
2	静かにすべき場面で走り回って騒いだり，わけもなく大声で泣く	4.35
3	いけない事を注意すると，ふてくされる	3.29
4	他のことに気を取られて，なかなかご飯を食べない	3.63
5	わざと，床（畳）にものをこぼして，しらを切る	3.96
6	掃除したばかりなのに，子どもが散らかし始めた	3.22
7	物をひっくりかえして騒いでいる	3.61
8	午睡時に布団を濡らしても平気な顔をしている	3.22
9	友達が「遊ぼう」といって誘っても，遊ぼうとしない	3.21
10	何をするにも行動が遅い	3.37
11	自分に注意してもらいたくて，ぐずったり困らせたり，暴言を吐く	3.54
12	さほどかゆいとは思えないが，かゆいといって寝てくれない	3.13
13	やりたい仕事があるのに，なかなか寝てくれない	3.49
14	お着替えの時，着替えるように言うが，嫌がって逃げる	3.88
15	忙しい時に，まとわりついて離れない	3.55
16	食事を食べず，おやつ（デザート）ばかりほしがる	3.38
17	物事に取り組むが，うまくいかずイライラし，頼ってくる	2.90
18	泣く理由がわからず，子どもがひたすら泣いている	4.22
19	いくらあやしても，泣きやまない	4.23

の時，食べずに遊んだり，立ち食いする(平均値4.13)」,「②静かにすべき場面で走り回って騒いだり，わけもなく大声で泣く（平均値4.35)」「⑱泣く理由がわからず，子どもがひたすら泣いている（平均値4.2)」「⑲いくらあやしても，泣きやまない（平均値4.23)」である。

これら4項目の中で，子どもの泣きに関連するものが3項目あり，子どもの泣きに対して特に学生はどう対応していいのか自分だったら困るであろうと考えていることが推察される。

次に，⑵の学生が実習を経験して，実際に「実習で対応に困ったこと」についての回答をKJ法を参考に分類した。

その結果は下記の通りである。

自分の対応に対し子どもが応じない24／74件：

次の活動に移ることができない（5），声をかけても泣き続ける（4），危ないと言ってもやめない（4）等。

子どもへの対応の難しさ9／74件：

泣いている理由が分からない（3），集中させられない（2）等。

子どもが複数の場合の関わり方19／74件：

喧嘩の対応（9）子ども同士のやり取りへの介入（5）等。

集団と個の対応のバランスの難しさ13／74件：

毎回，自分の所に来てほしいという子がいて，他の子どもたちと関われない（8）等。

以上のように，実習生が実習中に困ったことの中で,「泣き」は2つの大カテゴリ「自分の対応に対し子どもが応じない」「子どもへの対応の難しさ」の中に含まれており，実際に学生は「幼児が泣くこと」について対応が難しいと感じていることが推察された。

入江（2013）は一年未満の新人保育士へのインタビューを行い，新人保育士がどのような部分について，保育の難しさを感じているかについて検討を行っている。そして，幼児が低年齢であればあるほど言葉を介した言語的コミュニケーションが難しいため,「泣き続ける意味がわからない時があって」など，幼児の泣きへの対応が，特に，新人保育士が難しいと感じることの一つであると述べている（入江，2013)。学生は，新人保育士以上にそれまでの生活の中で子どもと関わったことが少ないため，子どもに泣かれると困り感を抱くことが推察される。

そこで，次に，同じような場面で，現場の保育士たちであればどのような対応をするのかを調べることとした。また，保育士の対応においても，経験の多さが違いを生み出すのかを調べるため，分析においては，3年未満の新任保育士と，3年以上の保育士に分けて，子どもへの対応の回答を検討した。

研究Ⅱ　保育士調査

方法

1．調査対象：A県の保育所保育士86名（女性）。

2．質問紙構成

⑴　幼児の問題行動を表す研究Ⅰと同じ19の状況（村松，2003）をとりあげ，どの程度困るか（5段階尺度）

⑵　学生たちが実習で，実際に困ったと感じた場面を，研究Ⅰの学生調査の自由記述を基に，それぞれ4つの具体的な事例の形にした。①1歳児の泣きの場面，②2歳児の着脱場面，③3歳児の食事場面，④5歳児のお集まり場面の4場面である。

①の泣きの場面の例：『朝，機嫌よく登園していきたBちゃん（1歳6ケ月）が自由遊びの時間に急に泣き出した。「どうしたの？」と声をかけたが泣くばかりで，なぜ泣いているのかわからない』

そして，それらの場面で自分ならどのような言葉かけをするか，またその際，気をつけていることは何か（全て自由記述）について回答を求めた。

⑶　その他：保育経験年数，性別等。

結果と考察

1．保育経験による，幼児の問題行動に対して保育者が感じる困難度

経験年数3年未満の保育士群（以下，新任保育者群）と，3年以上の経験のある保育士群（以下，経験保育者群）との間で，19の状況での困難度に違いがないかについてt検定を行った。

その結果，下記の6項目に有意な差が見られた。

項目7：物をひっくり返して騒いでいる

新任保育者群の平均値（3.36）の方が，経験保育者群の平均値（2.71）より有意に高く，新任保育者群の方が，経験保育者群よりも，騒ぐ子どもに対し，むずかしさを感じていることが示唆された（$t(85)=2.51$　$p<.05$）。

項目13：やりたい仕事があるのに，なかなか寝てくれない

新任保育者群の平均値（3.14）の方が，経験保育者群の平均値（2.49）よりも高く，新任保育者群の方が，経験保育者群よりも，なかなか寝付かない子どもに対しむずかしさを感じていることが示唆された（$t(85)=2.49$，$p<.05$）。新任保育者が新任であるために仕事のやりくりがうまくいかずに，やりたい仕事があるのに寝てくれない子どもに経験保育者以上に困ったと感じている可能性も示唆される。

項目14：お着替え時，着替えるように言うが，嫌がって逃げる

新任保育者群の平均値（3.79）の方が，経験保育者群の平均値（2.70）よりも高く，新任保育者群の方が，経験保育者群よりも，なかなか着替えてようとしない子どもに対し，むずかしさを感じていることが示唆された（$t(85)=4.17$，$p<.01$）。

項目15：忙しい時に，まとわりついて離れない

新任保育者群の平均値（3.21）が，経験保育者群の平均値（2.66）よりも高く，新任保育者群の方が，経験保育者群よりも，忙しい時に離れてくれない子どもに対し，むずかしさを感じていることが示唆された（$t(85)=2.09$，$p<.05$）。新任であるために仕事に不慣れで仕事のやりくりがうまくいかずに，まとわりついて離れない子どもに対して経験保育者以上に，より困ったと感じている可能性も示唆される。

項目17：物事に取り組むが，うまくいかずイライラし，頼ってくる

新任保育者群の平均値（3.50）が，経験保育者群の平均値（2.89）よりも高く，新任保育者群の方が，経験保育者群よりも，うまくいかずにイライラしている子どもに対し，むずかしさを感じていることが示唆された（$t(84)=2.46$，$p<.05$）。

項目19：いくらあやしても，泣きやまない

新任保育者群の平均値（4.29）が，経験保育者群の平均値（3.53）よりも高く，新任保育者群の方が，経験保育者群よりも，泣きやまない子どもに対し，むずかしさを感じていることが示唆された（$t(85)=2.58$，$p<.05$）。

以上の結果より，19項目のうち６項目において新任保育者群が子どもとのかかわりの難しさを経験保育者よりも強く感じていたことが明らかとなった。宮下（2010）は，「子どもの理解・対応の難しさ」が保育士にとってストレッサ―の因子であることを明らかにしているが，特に，「いくらあやしても泣きやまない」子どもへの対応には，実習生同様，新任保育士も難しさを感じていることが示唆された。

２．幼児が泣いている事例での，経験豊富な保育者の対応

そこで，本研究では４つの事例の中で，特に次の事例，『朝，機嫌よく登園していきたＢちゃん（１歳６ケ月）が自由遊びの時間に急に泣き出した。「どうしたの？」と声をかけたが泣くばかりで，なぜ泣いているのかわからない』をとりあげることにした。そして，具体的に幼児が泣いている場面でどのような対応が考えられるのかについての示唆を得るため，保育経験３年以上の保育士の対応を，KJ 法を参考に分類した。

その結果は表２のとおりである。

Ｂちゃんに対して状況を尋ねたり気持ちを受け止める等，Ｂちゃんの「泣き」への直接的声かけ（35／188件）だけでなく，泣きの裏の「気持ち」に対して，スキンシップ（55／188件），気を紛らわす（11／188件），そばにいる（５／188件）等の対応をしていた。

さらに，泣きの背後に別の問題があるのではないかという視点から，他児から噛まれたり，肩が外れたりしていないか，具合が悪いのではないか等の身体面・体調面のチェック（17／188件）も行っていた。

その他，Ｂちゃんへの対応だけに注意をむけるのではなく，より広い視野で，他児が不安にならないように，他児に対して「大丈夫だよ」と声をかける等，他児への関わり（24／188件）もあった。

表２　３年以上の経験のある保育士の対応

経験保育者のＢちゃんへの対応		
Ｂちゃんへの対応	スキンシップ（55）	抱っこする（４）
		抱っこして落ち着かせる（29）
		抱っこして気をそらす（７）
		抱っこして身体面体調面チェック（５）
		抱っこして気持ちを受け止める（３）
		抱っこ以外（７）
	Ｂちゃんの「泣き」への直接的声かけ（35）	落ち着かせる（４）
		気持ちを受け止める（６）
		気持ちを予測（３）
		状況を本人に尋ねる（22）
	泣きやむまで待ってから対応（18）	
	気をそらす（11）	
	そばにいる（５）	
	落ち着くのを待つ（３）	
保育士の視点	身体面・体調面のチェック（17）	
	周囲の状況から読み取る（２）	
他児への関わり	他児への関わり（24）	他児に状況を尋ねる（17）
		他児が不安にならないような声かけ（５）
		他児にＢちゃんをなだめるよう声かけ（２）
連携	保育士同士の連携（３）	
その他	その他（15）	

以上のように，３年以上の経験のある保育者は，多様な視点や，子どもの集団への幅広い視野をもって幼児と関わっていることが示唆された。大谷・武田（2011）は，学生は，子どもの姿を表面的にしか見ていないことがあると述べているが，実習生や新任保育士は，幼児の「泣き」という目の前の現象に気を取られてしまい，泣きやませることに一生懸命となることが考えられる。しかし，幼児の泣きの背後には，幼児が表出していないさまざまな原因や思いが隠れている可能性がある。そのような幅広い視野で幼児の泣きに対応していくことの重要性が経験保育士の回答より示唆された。

そこで次に，学生が実習において子どもの泣きに直面した時に，泣くことを想定もしていなかった，また，全く対応ができなかったというようなつまづき経験とならないように，研究Ⅲでは，授業の中に泣きの事例検討を取り入れることにした。そして，子どもは泣くことがあるというあたりまえのことを知り，その時の子どもの背後に考えられる原因やさまざまな思いを想像し，また，経験保育者の考える多様な視点を知ることで答えは一つではないことを知るという体験を授業にとりいれることにした。

研究Ⅲ．保育教育への展開の試み

方法

１．調査対象

Ａ県保育系大学で，複数回の幼稚園教育実習，保育所実習を経験したことがある４年生88名（女性）を調査対象とした。

２．手続き

研究Ⅱで用いた，Ｂちゃんの泣く事例を提示。まず個別に①どう感じるか，②Ｂちゃんや周りの子にどんな対応をするかを考えさせ記述を求めた。次に５～６名の小グループになって自分の考えを互いに話し合わせ，経験保育士の対応を提示した。さらに保育士資格をもつ教員がコメントを行い，最後に③自分の対応，小集団での話し合い，保育士の対応について振り返らせ，どう感じるか記述を求めた。

結果と考察

本研究では③の振り返りについて検討を行う。③のふりかえりの中での主なものには次のような記述があった。

・（私には）泣きへのとまどいがあった。
・早く泣き止ませなきゃいけないという思いが一番に働いてしまい，逆効果になるような対応をしていたのに気づいた。落ち着いて考えればさまざまなことが考えられるのに（と思った）。
・私は泣いている状態をどうにか解決したいという自分の感情が含まれていたので泣きへの対応しか考えられなかった。泣きへの不安が私の中にあることに気づいた。
・泣きの原因として身体面や体調面をチェックするというのは個人で考えている時は考えることができなかった。
・やさしく言葉かけをしながら，体温や外傷の有無を確認することなどを学んだ。
・泣いている子の身体面のチェックや，Ｂちゃんと向き合いながら他児へも気を配らなければいけないのだと思った。
・Ｂちゃんが泣いているということだけに集中してしまうのはよくない，一人で対応しようと思いこみすぎないこと，周りの子どもたちへの配慮とＢちゃんへの配慮のバランスを考えることも大切だと思った。
・Ｂちゃんが泣いていることで他児まで不安にならないように声かけをすることも大切なのだなと思った
・自分ひとりで他児やＢちゃんに対応しようとするのではなく，他の保育者の協力を得てもいいのだとわかった。子どもの不安を早く払しょくするなど子どものための連携は大切だと感じた。

年齢の低い乳幼児は「泣く」という手段で周囲にさまざまな自分の欲求や要求を伝える。幼児が泣くということをネガティブに受け取ってしまう自分に気づき，幼児が泣く場面で

の自分のとまどいや不安を理解すること，泣くことの背景にあるかもしれないいろいろな原因を考えてみること，泣いている子どもを泣き止ませられないという自分に注意を向けるのではなく，泣いているその子，その子の周囲にいる子どもたちのために何をしたらいいのかを考えるよい機会になったのではないだろうか。

総合考察

中野（2005）は保育実習を体験した学生へアンケートを行ったところ，学生が強化してほしい事前事後指導の項目の一つに，「子どもの対処法についての講義」があったと述べている。子どもに慣れていない学生は子どもにどう関わったらいいかを実習前にもっと知りたいと思っていると考えられる。このような子どもの対処法について学ぶ際に，講義という形式もあるが，相澤（1995）は，学生は一般論の説明では理解しにくいと指摘している。そして，講義形式よりも，具体的な場面を提示し，個人やグループで考えさせるような事例演習を今後の保育実習の事前事後指導にとりいれていくことを提案している。本研究の研究Ⅲはこのような事前指導における事例演習の実践の試みになったと思われる。

また，野本（2008）は，保育者が自分の保育のゆきづまりを，仲間の保育者と共に語り合うことの重要性を指摘している。本研究の研究Ⅲでは，学生たちは泣いている幼児への対応の難しさを周囲の学生たちと語り合った。泣いている子どもにどのようにかかわったらいいのかを仲間との語り合いの中で共感しあうことを通して，自分の考える子どもを見る視点が一面的であることを受け入れ，自分だけでは考えられなかった視点を経験保育士の回答より得て，子どもの行動をさまざまな視点から見る体験ができたと思われる。

また，本研究と類似のアプローチを行っている加藤（2017）の研究では，学生が困難と感じる保育場面をとりあげ，学生自身が考えを記述し，グループワークと発表を行い，意見をいいあい，保育経験のある教員がコメントを行うという授業展開がなされている。本研究の研究Ⅲでは，加藤（2017）が行った保育経験のある教員のコメントに加え，研究Ⅱから得られた経験保育者86名の考える対応の視点を提示して学生に考えさせたことで，さらに学生にとっては多様な見方があることを実感することにつながったのではないかと推察される。今後は，学生が実際の実習で多くの子どもとかかわるときに，子どもを見る視点に授業での経験を活かしていくことが望まれる。

引用文献

相澤譲治（1995）.「保育実習」指導における教授法の研究－とくに保育所実習での事前・事後指導を中心に－，平安女学院短期大学教育研究所年報（２），１-21.

加藤由美（2017）．実習生や若手保育者の困難場面における保育方法についての一考察，新見公立大学紀要，**30**，97-102.

厚労省「保育所等関連状況取りまとめ（平成30年４月１日）」

長谷部比呂美（2007）．保育実習に関する学生の意識について－実習不安を中心として，淑徳短期大学研究紀要，**46**，81-96.

東俊一（2003）．施設実習における実習生の目的・課題意識と学習内容に関する研究，保育士養成研究，**30**，25-40.
入江慶太（2013）．新人保育士が感じる保育の難しさとは何か：３歳未満児クラスにおける検討，川崎医療短期大学紀要，**33**，61-67.
入江和夫・福地昭輝・入江三津子（2014）．学生の保育実習不安と自立感，山口大学教育学部付属教育実践総合センター研究紀要，**38**，21-28.
宮下敏恵（2010）．保育士におけるバーンアウト傾向に及ぼす要因の検討，上智教育大学研究紀要，**29**，177-184.
中野菜穂子（2005）．保育実習生の達成感・満足感の構成要素と事前・事後指導の課題，岡山県立大学短期大学部研究紀要，**12**，97-105.
野本茂夫（2008）．保育者が保育のゆきづまりを乗り越えるとき―保育実践における保育相互の支え合いの意味―，保育学研究，**46**(2).
小川圭子・鎌田陽世（2014）．「保育所実習において学生が抱く感情についての調査研究Ⅱ―保育実習ⅠとⅡの比較から―」，教育心理学会第56回総会発表論文集，p. 822.
大谷彰子・武田俊昭（2011）．「気になる子Ａ」のいるクラスにおける保育者と学生の意識，日本乳幼児教育学会第21回大会研究論文集，pp. 124-125.
鈴木香奈恵，仲本美央（2005）．幼稚園教育実習に関する研究(1)実習前の不安感について，埼玉純真女子短期大学研究紀要，**21**，39-44.

＊本調査の一部は，平成25年度一般社団法人全国保育士養成協議会九州ブロック協議会助成金によるものである。